

内視鏡下に施行した脊椎再手術の検討

Evaluation of the lumbar spine reoperation performed by endoscopic procedures

湯澤 洋平¹、稲波 弘彦¹、高野 裕一²、古閑 比佐志²、近藤 幹大²、金子 剛士²

¹稲波脊椎・関節病院、²岩井整形外科内科病院

【はじめに】2014年に岩井整形外科内科病院で1500件の脊椎手術を施行し、1296件(86.4%)が内視鏡を用いた手術であった。そのうち68件が他医あるいは当院での手術後の再手術であった。一般的に脊椎再手術は癒痕のため手技が困難とされるが、当院では再手術も内視鏡下に施行している。

【方法】2014年に施行した内視鏡下の脊椎再手術68例(男53,女15)、平均年齢は57.0(25~87)才に関して、再手術の手術手技、再手術時の診断、手術合併症、手術成績を検討した。手術成績は術前と術後3~6ヶ月時の日本整形外科学会腰痛疾患治療判定基準(JOAスコア)から平林法による改善率を求めexcellent(100%-75%)、good(74%-50%)、fair(49%-25%)、およびpoor(<25%)とした。

【結果】内視鏡を用いた腰椎固定術が14件で再手術時の診断は椎間板変性9例、脊椎不安定性5例であった。内視鏡下部分椎弓切除術(MEL)が10件で再手術時の診断は再狭窄9例、術後嚢胞形成1例であった。内視鏡下ヘルニア摘出術(MED)が43件で再手術時の診断はヘルニアの再発37例、初回手術で症状残存が6例であった。手術成績は固定術でexcellent3例、good3例、fair6例、poor2例、MELでexcellent2例、good5例、fair2例、poor1例、MEDでexcellent24例、good11例、fair6例、poor2例であった。合併症は硬膜損傷6例、手術部感染症1例であった。手術部感染症は抗菌剤投与で速やかに沈静した。その他の重篤な合併症はなく、オープンコンバージョンもなかった。

【結論】当院では脊椎手術の86.4%を内視鏡を用いた手術としているが、一般的に手技が困難であるとされる脊椎再手術も内視鏡下に可能である。